

2024年度 吉尾地区 「地域福祉に関する住民アンケート」 結果のご報告

2026年2月

 家族・家計経済研究センター
Center for Research on Family and Household Economics

日本女子大学 家族・家計経済研究センターでは、吉尾地区社会福祉協議会との共同研究として2024年11月に「地域福祉に関する住民アンケート」を実施しました。ご協力いただき誠にありがとうございました。大変遅くなってしまい恐縮ですが、結果の概要をご報告いたします。



調査の背景・目的

現在の吉尾地区の地域福祉の実態や住民の意向を把握するため、また2014年に実施したアンケート（以下、前回調査）との比較を通じて、10年間の変化をみることを目的としています。

この10年の間には、吉尾地区でも人口減少や高齢化が進み、また2019年の南房総での台風被害や、2020年以降のコロナ禍などによって、地域社会や私たちのくらしのあり方も変化しています。改めて皆様の現状を統計的に把握し、今後の地域福祉のあり方を検討していきます。



調査方法・概要

- 調査期間：2024年11月15日～12月1日
- 調査方法：班（組）単位で全戸に質問紙を配布、原則として世帯主が回答後、封をして、ポスト受け渡し、もしくは直接回収先にて回収
- 有効回収率：71.7%（562世帯配布→回収数 432→白票などを除く有効回収数：403） ※参考：2014年実施時 91.9%（581世帯回収／632世帯配布）



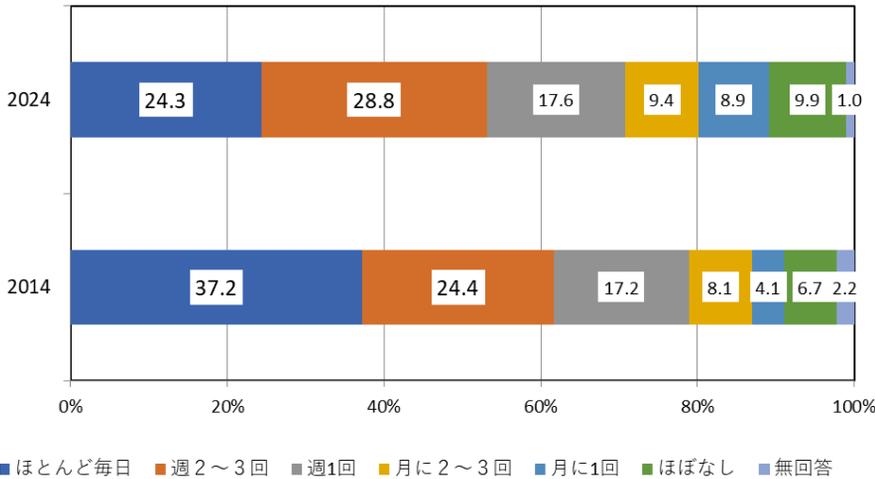
回答世帯の基本属性

- 性別 男性 64.3% 女性 34.5%
- 回答者の年齢 平均 69.1歳
- 世帯人数 平均 2.4人 ・ひとり暮らし世帯 24.8%
- 同居者（複数回答） 65～74歳の方がいる世帯 35.2% [2014年：33.0%]
75歳以上の方がいる世帯 46.9% [2014年：38.6%]
- 生活しづらいことがあったときにお手伝いしてくれる人→誰もいない 8.7%
- 地域交流や地域活動の場への参加→参加していない 26.3%

調査結果 1 地域での生活の様子について

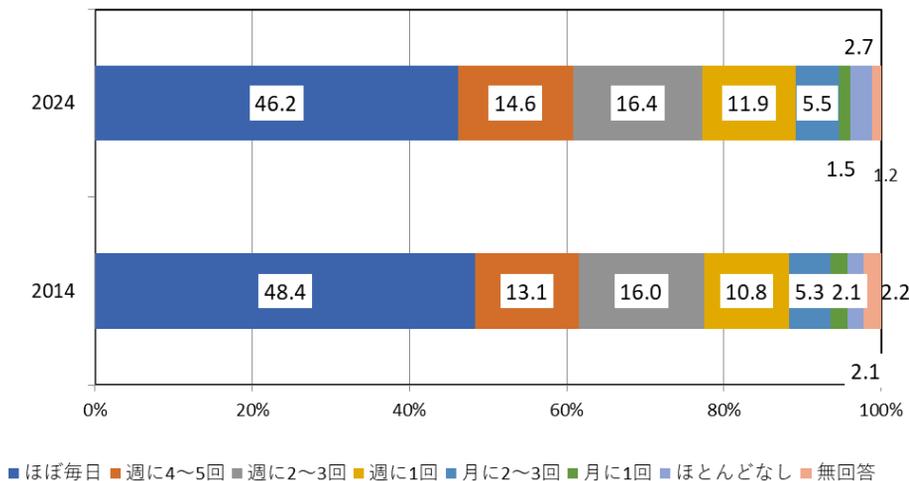
地域での生活の様子についてお尋ねしました。前回調査と同じ項目は比率を比較しています。

1) 近所の人とのあいさつや話の頻度



前回調査とくらべ、近所の人とあいさつや会話を「ほとんど毎日」している世帯が大きく減少し、交流が少ない世帯が増加しています。

2) 外出の頻度



前回調査とくらべ、回答者の年齢は高齢化していますが、外出の頻度は、「ほぼ毎日」が最も多く、あまり変化していません。

3) 日ごろの交通手段（複数回答→10人以上が○をつけた手段）

徒歩	9.7
自転車	4.2
チョイソコ	4.2
自分の車	86.4
家族に同乗	12.9

自分の車に○	
74歳以下	94.3%
75歳以上	74.3%

多くの方は、自分の車で移動しています。75歳以上の高齢者でも、車を利用している人が、75%近くと多くなっています。

調査結果2) サポートしてくれる人

緊急時や災害時の対応についてお尋ねしました。

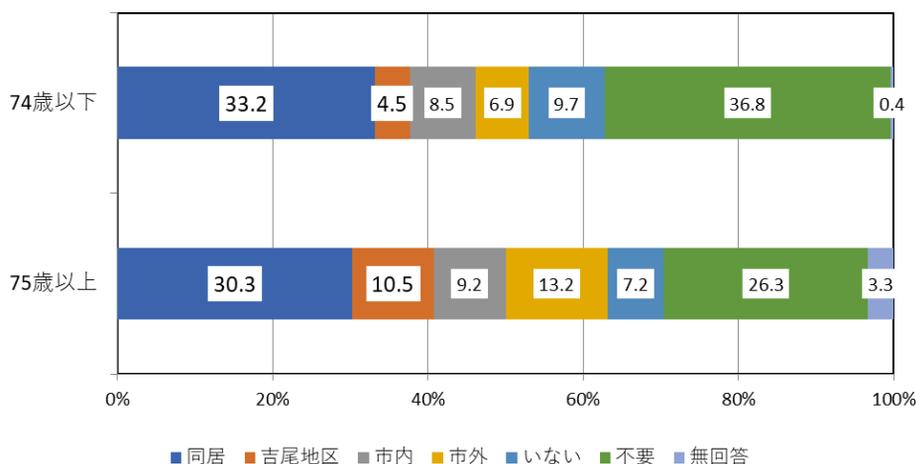
1) 緊急時・災害時の対応

	はい	わからない	いいえ	【2014年「はい」の比率】
A 病気、怪我などの際に助けしてくれる人はいますか	75.9	14.6	7.7	83.0
B 近隣の方にあなたの緊急連絡先を伝えていますか	40.7	4.7	52.1	43.7
C 避難の際に、一緒に避難する人はいますか	61.8	11.4	22.1	71.9
D 医療情報やお薬など、避難先でもすぐに情報を提示できますか	61.3	17.1	18.4	
E 災害時(地震・台風など)に備え隣近所で、助け合いの声かけをすることになっていますか	21.8	28.3	46.4	30.1

※前回調査のAの質問文は、「病気、怪我など不慮の事故の際に助けしてくれる人はいますか」とワーディングが異なる。

一緒に避難する人がいる、助け合いの声かけをする人がいる、という世帯が前回調査より減少しています。

2) 生活しづらい時に助けしてくれる方はどこに住んでいますか



1割近くの世帯で、助けしてくれる人がいないと回答しています。援助が必要という方に限定すると、74歳以下の方が、援助者が遠方にいるか、いない方が多くなっています。

3) さまざまなサポートをしてくれる人が「誰もいない」人の割合

	74歳以下	75歳以上
心配事 聞いてくれる	5.7%	3.9%
心配事 聞いてあげる	6.1%	5.9%
一緒に食事等	7.7%	7.2%
頼りにできる	8.1%	3.3%
会えるとうれしい	7.3%	2.6%

左の5つの内容について、多くの方が家族や友人など誰かには頼ることができるとお答えですが、心配事を聞いてくれたり、頼りにできる人が「誰もいない」という方が、74歳以下の方が多くいました。

	74歳以下	75歳以上
5項目すべてに「誰もいない」人の割合	2.8%	0.7%
5項目全部 「サポートあり」の人の割合	87.4%	90.1%

調査結果3) 生活援助や支援について

地区社協による取り組みや、終末期の暮らし方についてお尋ねしました。

1) 生活援助サービスの利用意向

	見守り	配食サービス	サロン	チョコイソコ	ゴミ出し等	草刈り等
利用中	2.2	1.5	5.0	5.5	1.7	3.0
利用したい	3.2	2.2	1.2	4.5	2.0	10.4
たまに利用したい	3.5	3.2	3.2	9.2	1.7	11.9
利用しない	12.7	13.6	20.3	10.7	12.2	9.7
内容を知らない	9.9	4.7	10.9	3.0	4.2	3.7
まだ不要	50.1	57.3	39.7	50.4	60.8	48.4
無回答	18.4	17.4	19.6	16.9	17.4	12.9
利用意向あり計	8.9	6.9	9.4	19.2	5.4	25.3

チョコイソコや草刈りといった生活援助サービスを利用したいと考えている世帯が1～2割ある一方、それぞれのサービスについてその内容を「知らない」という世帯もあります。

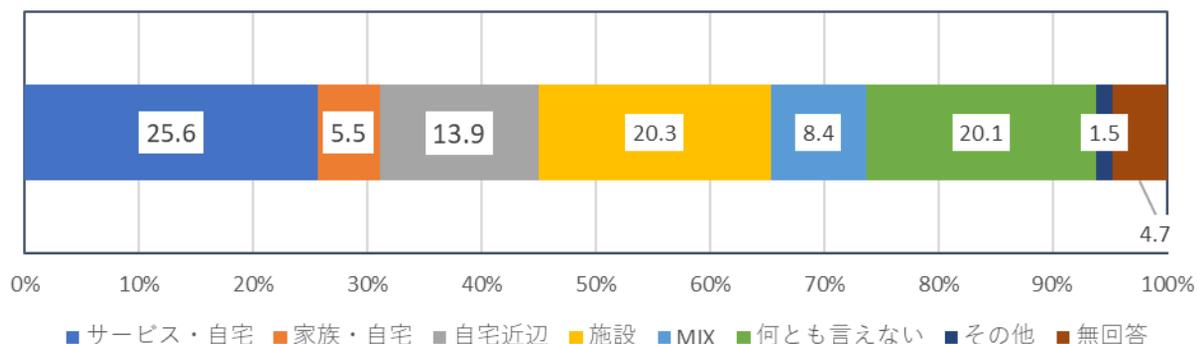
2) 金銭・財産管理の支援サービス

	はい	いいえ	無回答
74歳以下	44.1%	49.8%	6.1%
75歳以上	25.7%	56.6%	17.8%
合計	37.1%	52.4%	10.5%

今後、認知症等によって判断能力が衰えてきたときに、「金銭・財産管理をお手伝いするサービス」があったら利用したいかをお尋ねしました。

利用希望がある世帯は37.1%でしたが、年齢層別にみると、高齢層ほど「いいえ」や無回答が多くなっています。

3) 介護が必要になったときの希望

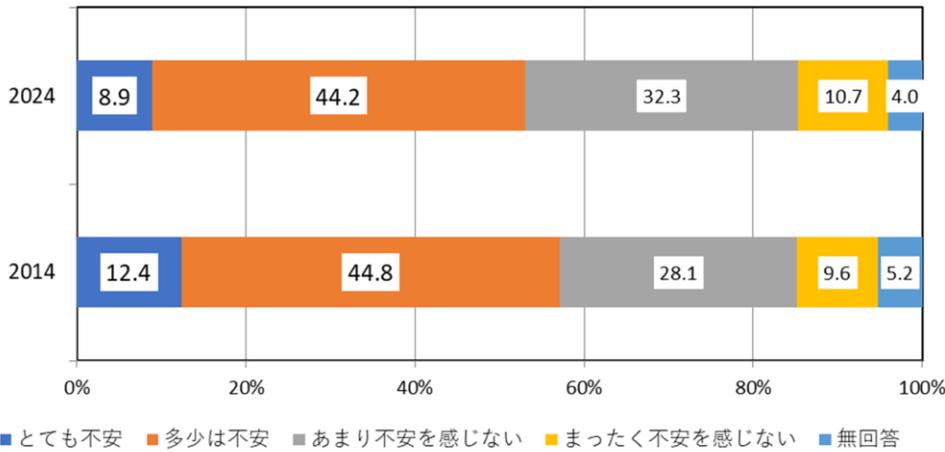


もし介護が必要になった場合、どのようにしたいかお尋ねしました。（介護サービスを使って）自宅や自宅近辺で過ごしたいというお答えが5割近くになりました。

調査結果4) 暮らしの不安など

日ごろの生活について感じていることをお尋ねしました。

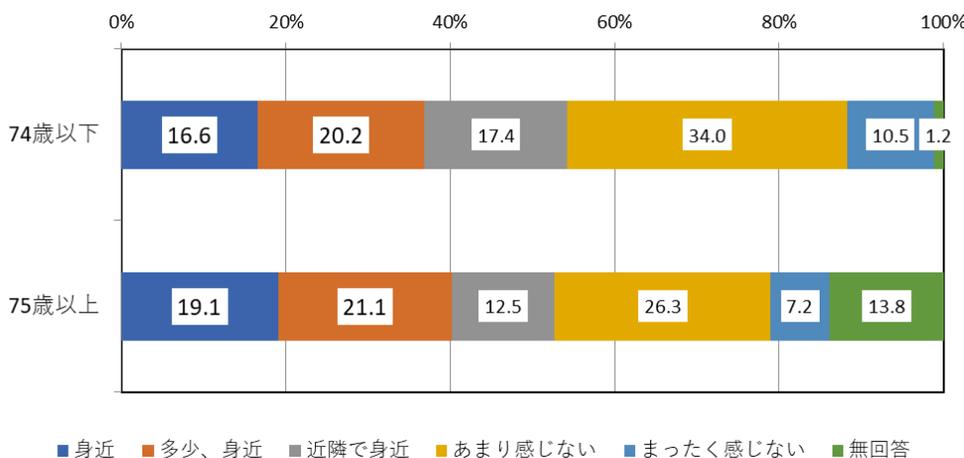
1) 地域での暮らしへの不安



地域での暮らし全般への不安をお尋ねしたところ、多少は不安が4割ほどでした。

前回調査とくらべ（高齢化していますが）不安を感じないとお答えになる世帯が多くなっています。

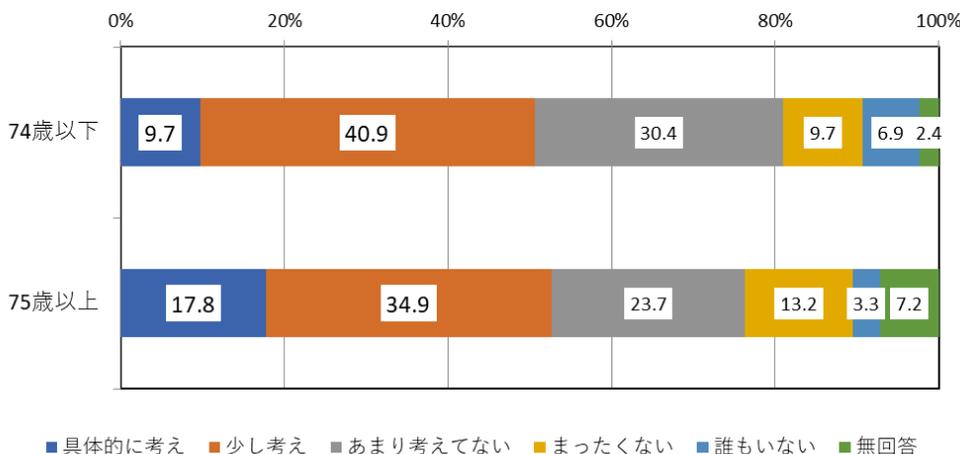
2) 孤独死を身近に感じるか



いわゆる「孤独死」をどのくらい身近に感じているかをお尋ねしました。

全体では「あまり感じない」が多いですが、75歳以上では、身近に感じている方がやや多いです。

3) 家や土地の継承



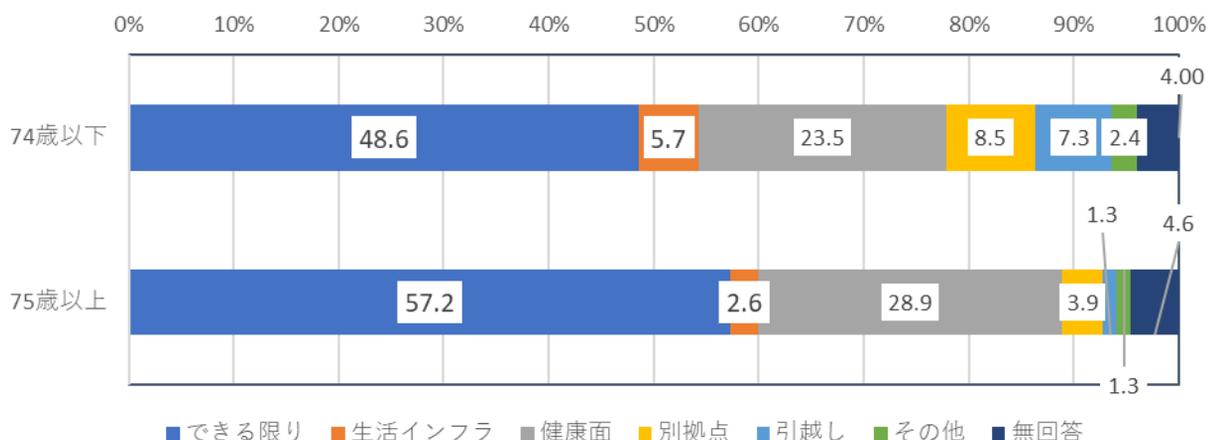
今後の家や土地、お墓等の継承についてお尋ねしました。

何か「考えている」という世帯が5割ほどでしたが、継承者が「誰もいない」という世帯も1割弱ありました。

調査結果5) 今後の意向について

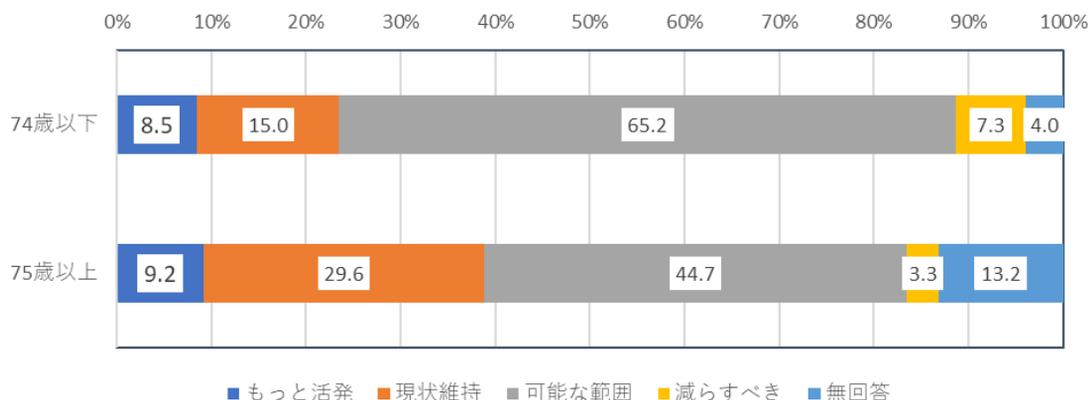
今後についてお尋ねしました。

1) 吉尾地区に住み続けたいと思いますか



できる限り住み続けたいという世帯が、75歳以上では6割近くでした。74歳以下では別拠点も構えたり、引越しも検討している世帯がやや多くなっています。

2) 今後の地域活動



今後の地域での交流や活動をどうすべきかお尋ねしました。全体では「無理せず、可能な範囲にすべき（縮小やむなし）」が多いですが、75歳以上では「できるだけ現状維持すべき」というお答えも多くなっています。

3) 今後の要望など（自由記述から）

- ・買物支援、代行
- ・（警察による）巡回、見守り
- ・移動手段の確保、利便性の向上
- ・体操や集まりなど、定期的に「出かける先」の確保
- ・災害時の避難のサポート
- ・子どもの「居場所」、移動図書館など
- ・害獣対策
- ・草刈り等、「便利屋」的なサポート
- ・安否確認の手段（デジタル機器の提供）
- ・現在よりも集まりや「役割」を減らしてほしい

調査結果のまとめ

吉尾地区では、人口減少や高齢化が進む一方で、新たに移住してくる世帯もあり、地区のくらしの様子は少しずつ変化しています。またコロナ禍を経て、近隣とのつながりや、働き方なども変わってきています。

前回調査とくらべて、日頃の近隣の人との頻繁な挨拶や、災害時の助けあいの可能性はおよそ10%ポイント低下しており、以前のような「ご近所との緊密な関係」は少し薄まっている様子がありました。

ただ、地域でのくらしの不安感（高齢化やコロナ禍で不安が高まる）ことが予想されますが）前回調査からあまり変化がありませんでした。災害時の備えなど、必要だと思う近隣とのつながりは確保されている世帯が多いことなどが背景にあると思われます。

ただし、日常生活、災害時などに避難したり、日常の困りごとを助けてくれたり、情緒的な面でサポートを期待できる人が「誰もいない」という世帯も1割近くあり、74歳以下の世帯でやや多くなっています。

今後は、さらに、ひとり暮らしの世帯も増えていくことが予想されますので、孤立・孤独にならないよう、いざという時に頼れる関係や、「おひとりさま」に対する地域での支援体制を築いておくことが課題になっているでしょう。

高齢層では要介護になっても吉尾地区でのくらしを継続したいと希望していますが、その具体的な準備までは十分ではないようです。

事前に地域で利用できるサービスなどを十分に把握したり、金銭管理や継承等について家族で相談したり、情報を共有し、希望する終末期の過ごし方が実現できるよう、（もし家族がいなくても）吉尾地区で安心してくらしをさせる体制を整えていくことが今後さらに必要になるでしょう。

一方、若い世代からは現状の地域活動の負担の重さや、役割の大変さについての声も多く聞かれました。充実した地域活動は、くらしを支える大きな力ですが、過大な負担では活動そのものが持続できません。今の若年層、そして、その次の世代も吉尾地区でのくらしを継続していけるよう、いま地域で必要な支援や、継続すべき取り組みを多世代で考えていくことが求められていると思います。

質問項目全体の結果（単純集計）を、当センターのHPに掲載しておりますので、ご覧になってください。

日本女子大学 家族・家計経済研究センター

<https://kakeiken.jp/>



（右のQRコードからアクセスしてください）